

平成 30 年度 スポーツ庁委託事業
大学横断的かつ競技横断的統括組織（日本版 N C A A）
創設事業（大学スポーツ振興の推進）
成果報告書

国際武道大学

2018年度 スポーツ庁委託事業 国際武道大学 成果報告書
「大学横断的かつ競技横断的統括組織（日本版 NCAA）創設事業」
（大学スポーツ振興の推進）

国際武道大学は勝浦市に開学し36年目になる。本学は建学の精神のもと、武道・体育・スポーツの研究活動を通して専門的知識や技術をもった人材を育成し、知的・物的資源及び人的資源を有効に活用することで、健全な街づくりに貢献する取り組みをおこなっている。2015年には、第2次安倍政権で掲げられた地方再生に伴い、いち早く勝浦市との包括協定を締結し、これまで以上の連携強化をおこなってきた。そして本学が地域社会の核となり、様々な企画を通して市民の健康やスポーツ振興に寄与している。

現在では、高齢化が進む市民の健康増進対策や、次世代を担う若者の健全な育成、地域の特性を活かしたアクティビティなど、幅広い世代の住民や地域に対する持続可能な取り組みに期待がもたれている。このような社会の要請を受け、本学の使命である教育・研究と部活動の強化を図り、大学のスポーツ振興および地域の健康・スポーツ振興に貢献し得る人材を継続的に提供し続けることが求められている。

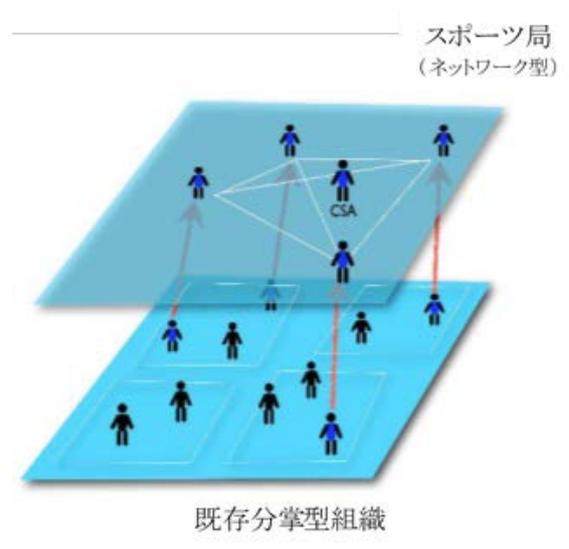
そこで現在の大学組織の運営についてより効率的な方法を検討し、本学および地域社会がより活性化するモデルの創設を目指すため、今回新たに設置するスポーツ局の役割について考えていきたい。

【スポーツ局の設置】

時代の流れが速くなり未来の予測が困難になってきた現在、緻密な計画をじっくりと時間をかけて作り出す余裕はなくなってきた。そのためアイデアが一定レベルまで成熟したら直ちに実行に移し、動かしながら改善していく機動的な組織が求められる。すなわち、従来の業務分掌型組織から、プロジェクト・マネジメント型組織へ移行する必要があると認識される。

しかし一方で、これまで安定的に本学におけるスポーツ教育・研究・社会貢献を担ってきた既存の分掌型組織の存在意義も否定できない。

そこで、日本版 NCAA に対応する基盤構築のために、学内既存組織を基本的に維持しながらも、その上に新しいレイヤーとしての「スポーツ局」を重ねて構築し、既存分掌型組織の枠組みを超えるネットワーク型組織の活動を促す。



【スポーツ局の役割】

本学が構想するレイヤー型の「スポーツ局」は、抜本的な組織構造改革に伴う大きな負担・衝突を回避しながら、これまで各部署が担っていた業務を横断的に結合し、情報の一括管理と各部署での共有をおこなう。また、新しいプロジェクトはスポーツ局が中心となり、関係者を招聘することで機動性をもって展開することを狙う。

【スポーツ局の運営】

スポーツ局ではチーフ・スポーツアドミニストレーター（CSA）を中心にプロジェクトを始動させ、学内から適任者を選任し、自らを議長として五人会議を開催し企画を策定する。そこで任命されたスポーツアドミニストレーター（SA）を中心としたプロジェクトチームで企画を遂行し、必要に応じてチーム構成の修正を行う。また、各プロジェクトでSAを支える他のメンバーが、アシスタント・スポーツアドミニストレーター（ASA）として運営に携わる。



第1回五人会議の様子

【スポーツ局のスタッフ】

学内既存の組織を基本的には維持しながら、新しいレイヤーとしてのスポーツ局を重ねて設置する。そのため現在は、CSAが所属する社会活動支援課が事務的業務を担当している。

スポーツ局長：清野義弘（事務局長）

勝浦市在住で柔道3段。地域に多くの人脈を持ち、勝浦市スポーツ推進委員を務める。

チーフ・スポーツアドミニストレーター：木村寿一（教授、社会活動支援課課長）

勝浦市在住2児の父。娘たちも通う勝浦スポーツコミュニティの設立に携わる。

スポーツ局スタッフ：曾我辺雅之（社会活動支援課課長代理）

勝浦市出身の本学卒業生。勝浦市役所との連携の要で、多くの地域イベントに携わる。

スポーツ局スタッフ：諸岡雄太（社会活動支援課職員）

本学卒業生の女子ハンドボール部監督。UNIVASや2020東京等の渉外を担当する。

【事業概要】

本学の地域社会における使命を考えたとき、地域住民の理解と応援が必要不可欠である。学生達が試合で負けても支える人々が満足する、「おらが選手 おらがチーム」という意識を市民や学生が持つことである。具体的には、学生の競技力向上（アスリートサポート）、地域の子供達の理想像となる学生（学生へのアカデミックサポート・キャリアサポート）、学生によるスポーツ支援活動（地域でのスポーツ指導支援、健康支援活動等、「おらが選手 おらがチーム」となる様々なチャンネルの開設と充実を図ることである。

そこで本学では、①学生アスリートのキャリア形成支援、②大学スポーツを通じた地域貢献、地域活性化、③スポーツ教育の推進、④スポーツボランティアの普及啓発、⑤スポーツ科学の研究とその成果の社会還元、⑥大学スポーツを活用した収益事業モデルの企画・立案の6つの視点から、新規および既存の事業について横断的なレイヤー型の学内組織を試し、各プロジェクトの成果について評価したいと思う。

評価方法は、既存プロジェクトを対象に「100を101」（改善）にする活動の「1」について、利用者数や参加者の満足度等を参考に事業評価をおこなった。また、新規プロジェクトでは、「0（ゼロ）を1」（開発）にしたことの社会的意義や企画のインパクトを検証し事業評価

をおこなった。そして両方の要因を持つ発展プロジェクト（改善開発）については、「100を101」にした部分と「0（ゼロ）を1」にした部分について事業評価をおこなった。

【事業実績】

実施時期	事業項目		
	①学生アスリートのキャリア支援	②大学スポーツを通じた地域貢献、地域活性化	③スポーツ教育の推進
9月	<ul style="list-style-type: none"> 公務員講座（3年生） 就職ガイダンス（4年生） 障害・医事相談 	<ul style="list-style-type: none"> 勝浦スポーツコミュニティ 勝浦市健康ハツラツ・フィットネス教室 いすみ市健康体力づくり事業 勝浦市大人の体力測定 御宿町健康・体力チェック 	<ul style="list-style-type: none"> NZ ラグビー・コーチングクリニック
10月	<ul style="list-style-type: none"> 公務員講座（3年生） 就職ガイダンス（3年生） 就活ゼミ（3年生） 教職塾（1～3年生） 	<ul style="list-style-type: none"> 勝浦スポーツコミュニティ 勝浦市健康ハツラツ・フィットネス教室 いすみ市健康体力づくり事業 	
11月	<ul style="list-style-type: none"> 公務員講座（3年生） 就職ガイダンス（3年生） 就活ゼミ（3年生） アスリート体力測定 	<ul style="list-style-type: none"> 勝浦スポーツコミュニティ 勝浦市健康ハツラツ・フィットネス教室 いすみ市健康体力づくり事業 	<ul style="list-style-type: none"> 公開講座 関東大学女子サッカー（リーグ3部第13節）
12月	<ul style="list-style-type: none"> 公務員講座（3年生） 就職ガイダンス（2・3年生） 就活ゼミ（3年生） 教職塾（1～3年生） 	<ul style="list-style-type: none"> 勝浦スポーツコミュニティ 勝浦市健康ハツラツ・フィットネス教室 いすみ市健康体力づくり事業 	<ul style="list-style-type: none"> 若潮杯争奪武道大会
1月	<ul style="list-style-type: none"> 公務員講座（3年生） 就職ガイダンス（3・4年生） 就活ゼミ（3年生） 魚調理教室 	<ul style="list-style-type: none"> 勝浦市健康ハツラツ・フィットネス教室 いすみ市健康体力づくり事業 	
2月	<ul style="list-style-type: none"> 公務員講座（3年生） 官公庁セミナー（全学生） 	<ul style="list-style-type: none"> 勝浦市健康ハツラツ・フィットネス教室、体力測定 いすみ市健康体力づくり事業、体力測定 	<ul style="list-style-type: none"> リーダーズキャンプ（全クラブ）
3月			
後期・通年事業	<ul style="list-style-type: none"> FT ルームの管理運用 ST ルームの管理運用 リコンディションルームの管理運用 キャリアデザインⅠ（スポーツと仕事）（1年生） キャリアデザインⅢ（産業社会の理解）（3年生） インターンシップ（3年生） スポーツデザイン実習「カンボジア企画」（3年生） 	<ul style="list-style-type: none"> 女子サッカー部へオルカ鴨川BU所属選手6名（本学学生）転籍して合流 本学学生がFIFA U-20女子ワールドカップ出場（優勝） 勝浦ニューハツラツ会 大原健康クラブ 岬健康クラブ 	<ul style="list-style-type: none"> 武道学園

実施時期	事業項目		
	④スポーツボランティアの普及啓発	⑤スポーツ科学の研究とその成果の社会還元	⑥大学スポーツを活用した収益事業モデルの企画立案
9月	・トレーナーブース設置 (全日本ライフセービング東日本大会予選)		
10月	・トレーナーブース設置 (ちばアクアラインマラソン、ライフセービング全日本選手権大会)		
11月	・千葉県立長生特別支援学校における剣道授業のサポート	・障がい者武道講習会 (ポーランド)	
12月		・初級障がい者スポーツ指導者養成講習(千葉県) ・勝浦中学校「郷育プロジェクト」(障がい者福祉)学習支援(これからの自分について考える)学習支援① ・障がい者武道講習会(セルビア)	・ふるさと納税を活用した本学および勝浦市民への貢献事業検討会
1月		・勝浦中学校「郷育プロジェクト」(これからの自分について考える)学習支援②	・KSC バレーボール教室ウインター企画「Vリーグ観戦」
2月		・カンボジアにおける体育ビデオ教材の普及活動 ・障がい者武道講習会(ハンガリー)	
3月			
後期・ 通年事業	・スポーツボランティア実習		・勝浦市との連携事業の広報強化

【活動実績：6つの事業項目における本学の特色のある事業】

①学生アスリートのキャリア形成支援：(既存プロジェクト)

スポーツデザイン実習(カンボジア企画)

(プロジェクト概要)

将来教員を目指すため教職課程を履修している学生が中心となって、カンボジアの小学校における体育科教育の振興に寄与するため、運動会の実践を通して小学生に運動の楽しさを知ってもらおう活動をおこなった。また、体育授業に関する指導案や体育実技の教材を作成し、SNS等で情報の発信を通して、カンボジアの小学校教員や教育実習生の支援をおこなった。

渡航先：カンボジア王国プレア・シアヌーク州小学校教員養成校(PTTC)

活動場所：オーチュラウ小学校、モノロム小学校、アヌワット小学校、カオン小学校

期間：2019年2月19日(火)～3月3日(月)

参加者：5名(1年生4名、3年生1名)

同行教員：2名

(活動内容)

授業「スポーツデザイン実習」(カンボジア企画)は、本学の学生がカンボジア王国プレア・シハヌーク州にある PTTC の学生たちと共に、現地小学校において運動会を開催し、児童に運動の楽しさを伝える活動である。学生たちは日本での事前準備において、現地での活動日程の調整、航空券・現地移動手段の手配、宿泊の手配、プレスリリース(朝日新聞 2月9日

(土)掲載、千葉日報 2月17日(日)掲載)、スポンサー企業(株式会社セノー、株式会社モルテン)との交渉もおこなう。また、クメール語の運動会マニュアルや PTTC の学生向け体育実技ビデオ教材の作成など、カンボジアにおける運動会・体育授業の普及に関わる取り組みをおこなっている。さらに、本学の活動とカンボジアの教育環境を周知するため、千葉市少年自然の家で開催されるわいわいフェスティバルや本学大学祭においてカンボジア紹介ブースを設置し、カンボジアの体育・スポーツ事情を紹介した。

渡航後は、PTTC の学生と打ち合わせおよびリハーサルをおこない、オーチュラウ小学校、モノロム小学校、アヌワット小学校、カオン小学校の4校で運動会を開催した。スポンサー企業から支援いただいた運動用具は、各小学校に進呈し体育授業や課外活動で有効に利用してもらうよう助言をおこなった。



千葉日報 2月17日(日)掲載



株式会社セノー様より支援いただいた綱



株式会社モルテン様より支援いただいたボール

このように学生たちはスポーツ支援事業を企画して、上記の活動を通してマネジメントを経験する。自ら考え、行動し、課題を発見し解決することでキャリアを積み、社会人基礎力や学士力を養った。

(プロジェクト評価)

今回、日本人学生が作成した運動会プログラムの種目を、PTTC の2年生が教育実習先の小学校で体育授業の単元として実施し、その模様を Facebook にアップロードしていた。また、他の2年生は、我々が実施した運動会種目を教育実習の体育授業で実践するために指導案にそれを記載し指導の準備をおこなっていた。また、我々が帰国後に、PTTC の学生たちだけで小学校での運動会を開催する予定であると PTTC の校長が述べている(昨年度も PTTC の学生だけで実施)。このように日本人学生の活動が、PTTC の学生に体育授業の手本となるような影響を与えられていることは、まさに国際社会における貢献事業として「100 を 101 にする活動」の成果であった評価したい。

②大学スポーツを通じた地域貢献、地域活性化：(既存プロジェクト)

勝浦スポーツコミュニティ (バレーボール教室、器械運動教室、タグラグビー教室)

(プロジェクト概要)

本学の人材と施設を活用して、スポーツを通じた世代間の交流や青少年の健全な育成による地域振興を目指し、2013年から実施されているプロジェクトである。通常、あまり縁の無い大学の施設を活用することにより、非日常的な環境で年齢や性別に関係なくスポーツ交流を図る集いの場として、スポーツコミュニティの機能を有した場を安価（1回250円～500円程度）で市民に提供している。そして、継続的な地域密着型のスポーツ環境の提供を通して、○地域交流の活性化、○健康的な運動習慣、○専門的な指導者や施設を利用した活動、○大学生へのスポーツ指導実践の機会提供を目的とした地域貢献を図る。そこで、勝浦市社会教育課と連携し、スポーツを通じた地域コミュニティ活性化事業「勝浦スポーツコミュニティ」(KSC)として、バレーボール教室（2011年開始）、器械運動教室およびタグラグビー教室を実施した。



KSC 器械運動教室の様子

〈バレーボール教室〉

開催日時：隔週月曜日（半期全8回開講）19：00～21：00

場所：国際武道大学3号館体育館

スタッフ：本学バレーボール部監督、コーチ、学生30名

参加者：勝浦市民および周辺地域の住民（参加者：96名）

〈器械運動教室〉

開催日時：隔週水曜日（半期全8回開講）18：00～19：30

場所：国際武道大学5号館体操場

スタッフ：本学体操競技部監督、学生15名

参加者：勝浦市および周辺地域の小学生（参加者：34名／定員40名）

〈タグラグビー教室〉

開催日時：隔週火曜日（半期全8回開講）18：00～19：30

場所：国際武道大学ラグビー場

スタッフ：本学女子ラグビー部監督、学生6名

参加者：勝浦市および周辺地域の住民（参加者：6名）



KSC バレーボール教室の様子



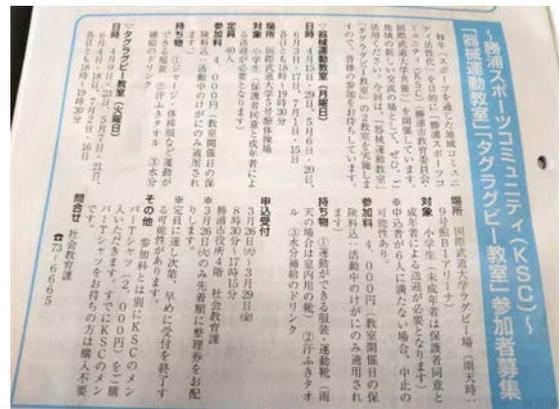
KSC タグラグビー教室の様子

(活動内容)

KSCの活動では、それぞれの教室において各部活動の責任者の指導の下、教職課程を履修している学生が中心となり他の部員と協力して、練習プログラムの作成や教室当日の準備・運営をおこなっている。バレーボール教室では、幼稚園児から60代の幅広い世代の市民を対象に、その日の練習テーマに沿った技術練習をおこない、後半のゲームでその技術を実践するプログラムをおこなう。また、小学生を対象とした器械運動教室では、参加者を6グループに分け鉄棒や平均台、跳び箱やトランポリンといった種目をローテーションしながら技術指導をおこなう。タグラグビー教室では、ボールの投げ方の技術指導から始まり、ラダーを使ったステップの練習、鬼ごっこ、ゲームといったプログラムをおこなう。学生たちはこの様な活動を通して、元気な小学生の統率を図ったり、年上の市民とコミュニケーションをとったりすることで、自らの社会性を認識し育む機会とする。将来、保健体育教員やスポーツ指導者を目指す学生にとっては、大学での学びと経験を実際の指導現場に還元し、練習メニューの作成や大会等の企画・立案、運営に携わることで、キャリアを積みつつ地域貢献事業に携わっている。

(プロジェクト評価)

バレーボール教室は2011年に創設以降、着実に参加者の数を伸ばしており、今年はいよいよ100名の大台を超える96名となった。一方、器械運動教室は募集人数40名に対して34名と定員を割っている。これは開催曜日の都合上、参加者の他の習い事との重複により、秋季の開講は毎年定員を割る傾向にある(月曜日開講の春季には、毎年、定員を超える応募がある)。この問題は、人口減少が著しい勝浦市特有のものと考えられ、学生の学業やクラブ活動を優先した開催曜日を設定すると、なかなか解決の糸口を見つけづらい問題でもある。タグラグビー教室は、2015年以降ここ数年、参加者の申し込みがなく(年によっては1名の希望など)開講されていなかった。しかし、小学校への巡回指導等で、タグラグビーの認知度が上がり、2019年ラグビーW杯の日本開催とも相まって、2018年度は春季から6名の参加者があった。秋季も6名の参加者がおり、今後、参加者の増加が期待される。「100を101」にする活動としては、参加者数の動向を見るかぎり、毎年、多くの参加者に支持してもらえ事業として定着している。その背景には、各クラブの部員が工夫を凝らしたプログラムを準備し、参加者にスポーツの楽しみ方を上手く伝え、円滑なコミュニケーションに努めている結果とも考えられる。



次年度のKSCの募集も既に始まっている
(広報誌かつら No.871 3月1日)

③スポーツ教育の推進：(新規プロジェクト)

NZラグビー・コーチングクリニック

(プロジェクト概要)

スポーツスマートジャパン日本基礎教育研究所の松田氏より本学女子ラグビー部監督の廣瀬(准教授)にコーチングクリニック開催の提案があり、その趣旨に賛同し本学を主催とした新規プロジェクトとして実施した。幾度かの会議の後、日程およびプログラム内容、参加対象者等の詳細を決定し、近隣市町村への協力、後援、協賛の依頼をおこなった。

本プロジェクトは、国際的な感覚と専門的な知識・技術・指導法を体得した指導者育成の一環として、ニュージーランドからラグビー指導の専門家を招聘し、日本のあらゆるスポーツ分野の指導者を対象に、生涯に渡りスポーツを通して他者を理解し、助け合える子供たちを育てるため、スポーツ現場における子供達への接し方など実践形式で指導方法を学んでもらうことを目的としている。



安全な技術指導の説明



コミュニケーションに関する講話

主催：国際武道大学

主管：スポーツスマートジャパン日本基礎教育研究所

日時：2018年9月23日（日）10:30～15:30

場所：国際武道大学ラグビー場

スタッフ：ニュージーランドからの招聘コーチ2名、
女子ラグビー部監督、学生6名、松田氏

参加者：少年スポーツ指導に携わる指導者19名

モニター：小学生30名

参加費：無料

協力：ニュージーランド マヌワツラグビー協会

ニュージーランド パーマストンノースマリスタジュニアラグビークラブ

国際武道大学女子ラグビー部

後援：勝浦市教育委員会 いすみ市教育委員会 一宮町教育委員会 茂原市教育委員会
鴨川市教育委員会 長生村（順不同）

協賛：ニュージーランド航空

（活動内容）

当日は本学ラグビー場にて、スポーツ指導者19名、モニターの小学生30名が受付を済ませた後、松田氏およびKent氏、Todd氏から挨拶があった。その後、練習における指導の注意事項等の説明があり、小学生モニターをモデルに実践練習が始まった。所々、英語で説明される部分を松田氏が通訳し、スポーツ指導者に日本語で伝えていく。最後に、ゲームをおこなって午前中の部を終了した。午後は、主にニュージーランドにおけるラグビー指導事情や子供たちとのコミュニケーションについて、松田氏の通訳を交えてなが

9:30～	受付
10:30～10:40	開会・挨拶
10:40～12:00	モデルレッスン（実践）
12:00～13:00	昼休み
13:00～15:30	セミナー（座学）
16:00～17:00	アフターファンクション

当日のプログラム

ら2名のニュージーランド人コーチによる講座をおこない、アフタークリニック・ファンクションをおこなった。

(プロジェクト評価)

本プロジェクトは、当初、あらゆるスポーツ分野の指導者を対象に、ニュージーランドのコーチングを学んでもらうことを意図していたため、勝浦周辺地域の教育委員会に後援となってもらい、各自治体での周知をお願いした。しかし、ラグビーというコンタクトスポーツ特有（だからこそ指導法としての特殊性もあらゆるスポーツに参考になると考えていた）の運動特性が、他のスポーツとの共通点を見出してもらうことができなかったのか、実際に参加したスポーツ指導者は、全員がラグビーやタグラグビーの専門家であった。そのため、指導に携わった2名のコーチも、専門のラグビーの視点のみで指導できる利点はあったと考えられるし、参加者にも日常で活用できる指導法を間近で見ることができた点は良かったと思われる。

2019年ラグビーワールドカップに向けて、前述のKSCタグラグビー教室のような動きは見てきたものの、勝浦の地において知名度も低いラグビーを実施したことは、「0（ゼロ）を1」にした社会的意義や企画のインパクトは評価して良いと考える。今後は次年度に向けてこのムーブメントを一過性のものにならないよう、2019年ラグビーワールドカップの良い遺産として勝浦に根付くような取り組みが期待される。

④スポーツボランティアの普及啓発：(既存プロジェクト)

スポーツボランティア実習（なでしこリーグ2部オルカ鴨川ボランティア企画）

(プロジェクト概要)

スポーツ分野におけるボランティア活動を通して、豊かな社会の実現に必要な「ボランティア精神」の育成を目的とした授業である。南房総初の女子サッカーチームオルカ鴨川FC（なでしこ2部）を盛り上げ、南房総地域全体のスポーツ振興と活性化に貢献するために、本学の学生がオルカ鴨川FCサポーターと共にボランティア活動を実践する。

受入先：オルカ鴨川FC

活動場所：鴨川市陸上競技場

日時：2018年10月7日（日）・21日（月）

参加者：16名（2年生3名、3年生13名）

同行教員：2名



選手のスイングバナーの設置



各ブースのてんと設営

(活動内容)

「スポーツボランティア実習」(オルカ鴨川 FC ホームゲームボランティア企画)は、本学の学生がオルカ鴨川 FC の一般のボランティアの方々と協力し、オルカ鴨川 FC ホームゲームの運営をサポートするボランティア活動である。本授業を履修する学生は、オルカ鴨川 FC について事前に調査し、レポートを担当教員に提出した上で、ボランティアに参加する。

ホームゲーム当日は、オルカ鴨川 FC 運営側で調整された担当ボランティアに本学学生が配置される。ボランティア内容は、サッカー未経験者でも対応できるものとなっており、コート の設置、チームベンチの設置、スポンサーバナーの設置、飲食店テントの設営、入場チケット 受付、駐車場警備、ボールパーソン、担架係などと多岐にわたる。オルカ鴨川 FC 試合運営担 当スタッフが、詳細わたってボランティア内容を本学学生に説明するため、本学学生も円滑に ボランティア活動を実践することが可能である。

ボランティア終了後この授業に参加した学生は、ホームゲームでの経験を詳細にまとめ、ス ポーツイベントにおけるボランティアの役割と意義といった内容でレポートを書き、担当教員 に提出する。



入場チケットの受付



スポンサーボードの準備

(プロジェクト評価)

本授業を通して本学学生がホームゲームの運営にボランティアとして携わることは、女子サッカーの実態把握や地域の方々と共に、南房総におけるスポーツの発展について学ぶ機会になっている。また、オルカ鴨川 FC の一般ボランティアの参加者が少ない現状を考えると、この地域のスポーツ活性化の一翼を担う大きな役割もある。最近では、スポーツイベントが大きくなるにつれて多くのボランティアが必要になることは周知のとおりである。地方の自治体が抱える人口減少の問題に対応すべく、本学の学生がボランティアとして活躍することは社会的意義のある事でもある。さらに、なでしこ 1 部を目指すオルカ鴨川にとっては、今後、チームや試合運営の規模が大きくなると思われる中、それらを支えるボランティアスタッフは非常に重要な役割を担うと考えられる。「100 を 101」にする活動として「1」の明確な効果を明らかにすることが難しいが、ボランティアとしての実務的な役割と地域におけるスポーツ振興の使命を担うとい経験は、学生のボランティア精神とその社会的責任感に大きな影響を与えていると思われる。オルカ鴨川 FC の発展と共に、学生のボランティア活動への新たな要望も増えることが考えられ、今後もスポーツボランティア実習を通じた継続的な支援に期待したい。

※本学女子サッカー部では、オルカ鴨川 FC のトップおよび下部チームに選手とコーチが所属し、なでしこ 2 部リーグや千葉県女子サッカーリーグ 2 部に参戦しながら大学リーグにも出場している。特に村岡真美は、U-20 女子日本代表に選出され、2018 年に開催された FIFA Women's World Cup France 2018 で優勝に貢献している。

⑤スポーツ科学の研究とその成果の社会還元：(発展プロジェクト)

勝浦中学校「郷育プロジェクト」

(プロジェクト概要)

地元「勝浦」の福祉や特色ある産業について学び、郷土に愛着を持ち、これからの自分やこれからの勝浦について考えることをねらいとする。勝浦の第一次産業に関わる体験活動、勤労生産に関わる活動を通して、「将来の生き方を考える力」を育てると共に、自分の生まれた郷土勝浦を愛する意識の高揚と地域社会との好ましい関係づくりを推進する。

また、中大連携の取組みとして、市内に位置する大学“国際武道大学”と連携・訪問することにより、地元の大学で提供されている学びにふれたり、大学で学ぶ意義について考えたりすることを通して、「将来の生き方を考える力」を育てる。特に「健常者の視点だけでなく、障がい者や高齢者などの視点から武道に接し、体験し、学ぶことにより、武道を通じた健康づくり社会の発展を目指し、健常者、障がい者及び高齢者といった概念を超越した成熟社会の実現に寄与する人材を養成」している学びにふれる。さらに、著名人を招集しておこなわれている特別講義を傍聴し、これからの生き方について考えたり“国際武道大学”で学ぶ意義と将来の自分の進路選択を絡めて考えたりする機会とする。



障がい者武道講習会(中学1年生対象)

(勝浦市立勝浦中学校 平成30年度『郷育プロジェクト』より抜粋)

〈障がい者武道講習会〉

日時：2018年12月6日(木) 13:30~15:00

場所：勝浦中学校体育館

講師：松井完太郎(教授) 学生2名

対象者：勝浦中学校1年生(97名)

〈これからの自分について考える〉①

授業：スポーツ戦略論Ⅱ(3年次後期：選択、火曜日3時限目)

ゲスト：大林素子(元全日本バレーボール代表)

日時：2018年12月11日(火) 13:10~14:40

場所：国際武道大学

対象者：勝浦中学校3年生(98名) 教職員5名

〈これからの自分について考える〉②

授業：スポーツ戦略論Ⅱ(3年次後期：選択、火曜日3時限目)

ゲスト：原辰徳(読売巨人軍監督 本学客員教授)

日時：2019年1月7日(火) 13:10~14:40

場所：国際武道大学

対象者：勝浦中学校第3学年(98名) 教職員5名

(活動内容)

本学の武道学科では、武道健康福祉コースを設定し、障がい者や高齢者などの視点から武道を探求している。特に障がい者武道においては、本学の松井（教授）が障害者武道協会の副代表理事の職に就き、日本武道学会の障害者武道専門分科会の設立に貢献した。学内では、障害者武道論を担当し、これまでに国内外で多くの障がい者武道講習会を開催し、その英知は国内トップクラスである。今年度も、ヤン・ドゥゴッシュ大学（ポーランド）、Nis 大学（セルビア）、ハンガリー国立体育大学において障がい者武道講習会を実施している。

講習内容は、先ず、「障がいとは何か?」「武道の運動効果について」等、簡単な座学で中学生に障がい者と武道のつながりを理解してもらい、次に、実際に柔道の帯を利用して身体を拘束し運動してもらい、障がい者の立場を疑似体験しながらバランスのとり方や運動効果などを実感してもらう。最後にまとめを述べて終了となる。

一方、本学で開講しているスポーツ戦略論Ⅱ（3年次後期：選択、火曜日3時限目）では、オリンピックやワールドカップなどハイレベルな戦いが展開される大会において、選手、指導者、チーム運営、マスコミ等、様々な立場からスポーツの現状を検証し、競技スポーツを多角的に捉える授業を実施している。特に各界で活躍した選手や監督、コーチやスタッフ等、多くのゲスト講師を招いて、その時代のトップレベルのスポーツについて生の声を聴くことができる名物授業である。今年度は、全日本女子バレーボールでソウル五輪、バルセロナ五輪、アトランタ五輪の三大会に出場した大林素子氏の講演と、読売巨人軍の監督に就任した原辰徳客員教授の講演を勝浦中学校3年生の皆さんに聴講してもらった。



スイングバナーの横を通って中学生が来校



講演の前に体育大学の授業について聴講

(プロジェクト評価)

これまで本学は勝浦市との包括協定により、勝浦市教育委員会と連携して市内の小学校・中学校へ、「体力測定」や「水泳授業」、「放課後教室」や「クラブ活動」といった様々な支援事業をおこなっている。今年度は、本学の専門性を最大限に活かした支援事業として、勝浦中学校が企画した「郷育プロジェクト」に協力すべく勝浦市教育委員会および勝浦中学校と協議した。過去におこなわれた「勝浦中学校の生徒による授業見学」では、専門的な授業内容に中学生が戸惑い、あまり良い成果を得ることはできなかった。そのような反省を踏まえて、本学が提供できる研究成果の社会還元として、実習も伴った「障がい者武道講習会」が選定された。また、研究成果とは趣旨が異なるが、「スポーツ戦略論Ⅱ」は勝浦市において著名人の話を聞く機会が極端に少ない中学生にとって、スポーツ界で活躍している人の話を生で聞ける絶好のチャンスである。プロジェクト終了後、勝浦中学校の「郷育プロジェクト」担当教員と話をし

た際、次年度も引き続き協力願いたい旨の依頼を受けている。障がい者武道講習会を担当した松井によると、生徒たちの積極的な質問や意見、実習の態度は非常に優秀で、中学生への教育効果として「100を101」にした活動に相応しい成果であったと考えている。また、「郷育プロジェクト」として、以前の反省踏まえた2つの新たな取組みは「0（ゼロ）を1」にする活動として評価できると考える。



原辰徳監督の授業を聴講する中学生



中学生の質問に答える大林素子氏

⑥大学スポーツを活用した収益事業モデルの企画・立案：(新規プロジェクト)

ふるさと納税を活用した本学および勝浦市民への貢献事業検討会

(プロジェクト概要)

現在、勝浦市がおこなっている「ふるさと納税」では、その寄付金を6つの事業に充てているが、そのひとつに「国際武道大学応援に関する事業」を設けること並びに、同制度に基づいて本学が得た資金を、勝浦市民および大学スポーツの振興に充当する制度の検討をおこなった。

日時：2018年12月18日（火）14：00～

場所：勝浦市役所企画課

参加者：本学教員1名、職員2名、市役所企画課職員1名

(プロジェクト内容)

ふるさと納税で得られた納付金を活用し、本学および勝浦市民への貢献事業として、スポーツ施設の管理運営やスポーツ活動の普及・振興について協議した。話し合いの中では、ふるさと納税を活用した際の問題点として、昨今、話題となっている返礼品について話題となった。具体的には、大学グッズなど本学独自の返礼品を準備するのか、あるいは地元産業の返礼品を準備するのかといった問題である。現在、勝浦市の「ふるさと納税」のWebシステムでは、本学を別途支援事業と指定して納税することができない。また、納付金の中から本学に限定して助成金を出すには、何に活用するのか市民の理解を得る必要があるといった課題があげられた。既に他の地方自治体によって始められている地元大学との連携による「ふるさと納税」を参考に引き続き協議していく必要があると判断した。

その他、各部活動が試合や合宿への遠征の際、大学バスを利用し関東一円を移動する。そこで「勝浦市ふるさと納税ラッピングバス」を巡行し、本学へ広告掲載料を支払うといったアイデアも話し合われた。

(プロジェクト評価)

ふるさと納税を活用した収益授業については、まだ、検討段階であり具体的な方策を見出すことはできていない。一方で、「②大学スポーツを通じた地域貢献、地域活性化」で述べた、勝浦スポーツコミュニティ (KSC) のプロジェクトは、大学スポーツを活用した収益事業として最も実現可能な事業である。また、KSC バレーボール教室のウインター企画「Vリーグ観戦」(1月27日(日) 大田区総合体育館 サントリーサンバース vs 豊田合成トレフェルサ) では、市民16名の参加者と共に本学卒業生3名が所属する豊田合成の試合を観戦した。このようなプロジェクトは、参加者数の増大といった課題はあるものの、トップスポーツを観戦する機会の少ない市民への地域貢献や、市民のスポーツを応援する意識の醸成といった多岐にわたる大学事業の効果が期待される。今後、様々な視点から大学スポーツを活用した収益事業の検討を行う必要があると考える。

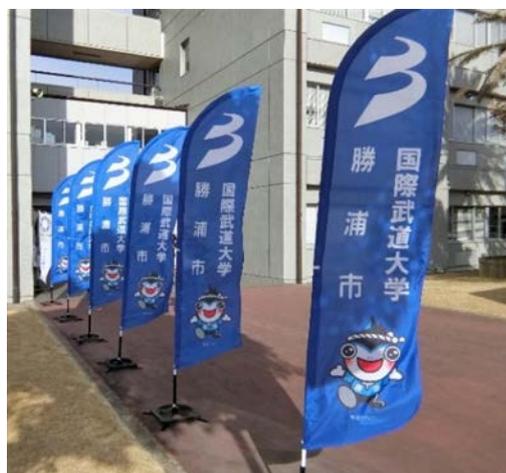
【汎用プロジェクト】

・本学と勝浦市の連携についての広報強化

(スイングバナー、ステッカー、横断幕の作成)

これまでに本学における勝浦市との共同企画では、健康ハツラツ教室やKSC、学園祭といった様々な活動を実施してきたが、ここ数年、当然のように事業がすすめられ広報や周知といった市民へのアピールに重点を置くことがなく、連携事業としての盛り上がりに欠けていた。そこで本学のシンボルマーク「B ウェイ」と勝浦市のキャラクター「勝浦カッピー」をプリントしたスイングバナーやステッカーを作成し、共同企画を実施する際に会場にスイングバナーを設置し、参加者にステッカーを配布することで、本学と勝浦市との相互扶助の関係をアピールできないかを検討した。

前述の1月7日に実施された勝浦中学校「郷育プロジェクト」〈これからの自分について考える〉②の際、学内にスイングバナー設置し、来学した勝浦中学校の生徒、教員及び勝浦市教育委員会の関係者にステッカーを配布した。さらに、KSCのバレーボール教室、器械運動教室、ラグビー教室の参加者全員にステッカーを配布し、改めて本学と勝浦市との連携事業であることをアピールした。特に「郷育プロジェクト」におけるスイングバナーの効果は、勝浦中学の生徒にアピールする以上に、原辰徳客員教授の取材に訪れたマスコミの目に留まり、勝浦市の良い宣伝になったように思われる。



「郷育プロジェクト」でスイングバナー設置



B ウェイと勝浦カッピーのステッカー

勝浦中学の生徒にアピールする以上に、原辰徳客員教授の取材に訪れたマスコミの目に留まり、勝浦市の良い宣伝になったように思われる。

勝浦市では毎年、本学に来年度入学してくる新入生が勝浦市に転入してくる3月中旬頃から、市役所の正面玄関横に「歓迎 国際武道大学新入生のみなさん ようこそ勝浦へ」と書かれた巨大な懸垂幕を設置してくれる。一方、本学では勝浦市との連携を新入生にアピールする対策を持っていない。そこで、本学と勝浦カッピーがプリントされた横断幕を作成し、サッカー場と3号館体育館に設置した。これは、春休みに新1年生が事前練習しに来る際や、他大学が本学にて合

宿をおこなう際に、また、オープンキャンパスで来校する高校生に、本学と勝浦市との連携をアピールする効果が確認された。



体育館入口向かい正面の手摺に横断幕を設置



勝浦市役所前 新入生を歓迎する懸垂幕

このようにスイングバナーや横断幕、ステッカーは、本学で実施される様々な連携事業に汎用的に利用することにより、より多くの人々へ本学と勝浦市との連携をアピールすることができる。今後も本学と勝浦市との連携をより親密にし、勝浦市との共同企画においてこれらを活用することで広報の強化を図り、勝浦市における本学の存在価値をアピールするとともに、勝浦市に貢献し得る企画を実施していきたい。

・「おらが選手 おらがチーム」

(スイングバナーと横断幕の作成)

1984年に勝浦市長の尽力で、本学が勝浦市に建学されて35年が経過し、今では本学学生が勝浦市人口の1割に相当するまでになった。これまでも本学学生が、全国大会、世界大会で活躍するたびに、勝浦市内には市役所が中心となって顕彰横断幕が掲揚されるなど、応援を受けてきた。また一方、大学・学生は市内子どもたちへの武道・スポーツ指導、市内高齢者に対する健康支援サービスなどを提供してきた。しかし、地域住民にとって、本学学生達は4年



ホームゲームを印象付けるスイングバナー



広報誌 Way で村岡を特集

間で勝浦市を離れる「よそ者」という側面を持ち、通学時のバイク騒音など、負の側面がクローズアップされることもあった。そこで、学内で行われる各部活動の公式戦に、これまで以上に地域住民の方々に応援に来ていただき、大学の教育活動への理解、大学・学生による健康・武道・スポーツサービスの利用浸透を図ることをめざして、「勝っても負けても、おらが選手 おらがチーム」をスローガンとした活動を展開した。

この活動は、大学の教育活動への理解、大学・学生による健康・武道・スポーツサービスの利用浸透を図るさらに「観る（応援する）」スポーツ文化の醸成を図ることもできる。特に体育系大学において自らの専門技術を磨く一方で、学生たちが専門競技以

外の武道やスポーツを「観る」機会は非常に少ない。地域住民の方々を動員して「観る（応援する）」スポーツ文化の醸成を図るだけでなく、本学学生たちの中でも内でも自らが所属する部活動以外を「応援する」機運を醸成し、単に地域住民の方々に応援されるのではなく、本学学生と地域住民の方々が一緒に「おらが選手 おらがチーム」を応援する強い応援文化を根付かせることを目的とした取り組みをおこなった。

本学女子サッカー部は、オルカ鴨川 FC（なでしこ 2 部リーグ）・そのサテライトチームのオルカ鴨川 BU（千葉県女子サッカーリーグ 2 部）と一体となって『南房総地区女子サッカー普及、未来のなでしこ育成プロジェクト』を実施している。具体的にはオルカ鴨川 FC・サテライトチームのオルカ鴨川 BU に学生を選手として、また職員をコーチとして所属させ、また公式戦の運営に教職員・学生を派遣してきた。

2018 年度は、オルカ鴨川 FC で活動する村岡真美（体育学科 3 年）が、U-20 女子日本代表に選出され、2018 年に開催された FIFA Women's World Cup France 2018 で優勝に貢献し、また、秋からは、オルカ鴨川 BU の下部チームとして国際武道大学女子サッカー部として関東大学女子サッカーリーグにも参戦した。これを契機に、勝浦市と鴨川市をまたいだ 3 チーム一体となった連携活動を広く自治体の枠組みを超えて地域全体に広げるために、サッカー場に横断幕やスイングバナーを設置し、本学とオルカ鴨川 FC との連携のアピールし、本学教職員・学生・地域住民が一体となった応援文化醸成を図った。



本学とオルカ鴨川 FC の連携をアピールする横断幕をサッカー場ゴール横に設置



横断幕の前で練習する女子サッカー部員



オルカ鴨川 BU に所属する学生の練習試合

【総括】

（スポーツ局の運営）

本学では、これまでスポーツ教育・研究・社会貢献といった取り組みは、既存の部署でそれぞれに業務をおこなってきた。今年度「大学横断的かつ競技横断的統括組織（日本版 NCA A）創設事業」が採択され、既存の組織を維持したままその上に新しいレイヤーとしての「ス

ポーツ局」を設置し、各部署でおこなわれている業務を横断的にまとめ、情報を集約し管理する役割を担った。また、新規プロジェクトが企画された場合は、関連部署から教職員が選任され業務に取り組むことができた。学生数が約 1,670 人、教職員数が約 110 名と、さほど規模が大きい本学にとっては、新たな部署を設置し新たな教職員を配置することは、専門部署のスペース確保や各部署の人員削減といった問題が考えられた。それ以上に、これまで安定的に業務をこなしてきた各部署の仕事を分割し、スポーツ局の業務として統括していくことの方が、大学運営にとって負担となることが予測された。今回、実際にレイヤー型のスポーツ局の運営をしてみて、この規模の大学にとっては既存組織横断的なレイヤー型のスポーツ局は理想的であったように感じる。

(各プロジェクトの多様な社会的価値)

今年度、本学の社会貢献事業は、120 件（3 月 15 日現在）の地域活動協力依頼に対して、延べ 1,310 名の学生と 61 名の教職員が派遣されている。そして、今回、スポーツ局の取り組みによって、これら社会貢献事業のそれぞれの企画が多岐にわたる事業項目に当てはまることが認識できた。例えば、勝浦スポーツコミュニティ（KSC）のスポーツ教室が、「①学生アスリートのキャリア支援」として学生にとっては専門競技の指導の機会を得ていること。「②大学スポーツを通じた地域貢献、地域活性化」では、部活動が地域住民にスポーツ実践の機会を提供していること。「④スポーツボランティアの普及啓発」学生自らが率先してこのプロジェクトに参加してくれていること。このようにそれぞれのプロジェクトが、多くの意義を持ち運営されていることは、本学および勝浦市や周辺地域にとって大きな社会的価値を見出すことができた。

【今後の展望と課題】

今年度、スポーツ局の名称でおこなってきた業務は、次年度から、新たに「武道・スポーツセンター」と名称を変更し、引き続き大学事務局長（清野義弘）をセンター長として、学長・副学長の直轄組織として運営していく。教育・研究機関として建学の精神に則り、スポーツ分野における現代社会の諸問題に取り組む研究し、自らの専門性を活かして社会に貢献する人材の育成を通して、国際社会・地域社会の発展に寄与する使命を担うことになる。そのために、レイヤー型の武道・スポーツセンターが学内の横断的連携を促し、各部署のアイデアや問題を共有し既存プロジェクトの改善や新規プロジェクトの立案を積極的に進め本学の理念を具現化する。

レイヤー型のスポーツ局（武道・スポーツセンター）は、全教職員が、それぞれの配属先で担当業務を継続すると同時に、体育大学としての全体的視点（教育・研究・社会貢献）をベースとした、開発型の企画立案（0 を 1 にする企画立案）、継続発展型の企画立案（100 を 101 にする企画立案）につなげ、それらの業務に自ら関わることにより、スタッフ・デベロップメント、ファカルティ・ディベロップメントの大きな機会となりうる。

しかし今回、レイヤー型で設置したスポーツ局は、その特徴として組織の構造改革なしに運営する形態であるため、各部署からプロジェクトに参加した者には認知されたものの、他の教職員にスポーツ局が担う業務意義について詳細を把握してもらうことが困難であった。特に本学のような体育大学にあっては、大学に勤務する職員が、レイヤー型スポーツ局（武道・スポーツセンター）での活動を通じて、大学の教育・社会貢献活動の対象である学生・地域住民と直接関わることは、自らのすべての業務の最終的な行き先を直接捉え、仕事の意義や有効感覚

を回復強化する重要なものとなる。これまで体育大学に勤務しながらスポーツを通じた教育・社会貢献活動への直接参加機会が無かった職員に5人会議への参加機会を提供するなど、一層の浸透に努めたい。

次年度は、名称を変更した「武道・スポーツセンター」を、学内の教職員に広く浸透させるため、センターの業務内容を明確にして学内に周知・徹底していく。さらに研究機関としての使命を果たすために、学内の研究支援委員会との連携も強化し、スポーツ界や高齢社会に向けた対策などで貢献していきたい。特に3月に発足したUNIVASの事業内容を鑑みると、「武道・スポーツセンター」と教務課・教務委員会、学友会との連携は非常に重要と考えられる。UNIVASと本学を繋げる窓口として、学内に正確な情報を提供するとともに円滑な業務をおこなえるよう体制を整えていきたい。